

碑文 訳

玉井丈次郎先生彰徳碑

従四位子爵 藤堂高寛篆額

事業を立派に成しとげ徳を世に広める者は、死後に残した恵みや名声はいつまでも残って、死後もなお生きているのと同じである。今これを郷土の先輩に求めるとすれば、玉井丈次郎先生のような方こそふさわしい人である。先生は安政五年久居本町五丁目に生まれ、若い時から久居小学校の教職に就き、昇進して校長となり、その職にあること六年、その教育の感化は学校の内外に行きわたり、その名声は広く人々から評価された。明治二十年三重県の属官に抜てきされ、多年にわたって真面目に励み、桑名郡長に昇進し、事務の管理に明るく、政治面の功績が大変多かった。三十五年、役所をやめて東京に出て病の養生に入った。

わが国軌道式鉄道の開祖である雨宮敬次郎は、前からよく先生のことを知っていたのでその考えを取り入れ、津と久居間の路線を実際現地で調査し、軌道を設けることを決定した。先生は経営の仕事を担当し素早く事を処理したので、この事業は早く実現できた。それは後の中勢鉄道である。先生が在

京中、はからずも第三師団の衛戍部隊^{えいじぶ}を、三重県下に置くとの相談があることを知り、久居の地はこれに適當だと思った

ので町の役人に話したところ、久居の町はすぐに一致してその誘致に賛成した。関係の郡や市も協力して当局に陳情し、先生もまた精力的に奔走された。ついに部隊の招致が実現して、五一連隊が近い郊外に置かれ、その上軌道もまた同時に開通したので町の勢いが急に盛んになり、日とともににぎわいを増して今日の状態をもたらした。先生はさらに伊勢鉄道株式会社を創設して専務取締役の職に就き、その信望は日を追って高くなり、津市選出の三重県会議員に選ばれた。とかくしているうちに持病が再発して急に亡くなられた。時に大正三年（一九一四年）一月十一日、享年五十七歳であつた。訃報を聞く者一人として嘆き惜しまない者がなかつた。先生は真心をもつて人をもてなし、とりわけ旧知の人には手厚かつた。中年のころ住まいを津市に移したが、平素から故郷（現津市久居）の福利を願つて、色々と試みた手立てが成功して、次第に衰えていこうとするところをあやうく立ち直らせた。先生が徳を植えつけることはこのように手厚かつた。町民は皆で相談の結果、碑を建て先生の功績を刻みつけることとなり、その文を私に求めてきた。私は長い間この計画を待っていたので、喜んでそのあらましをこのように書いた次第である。

昭和三十年十一月

授業弟子 梅原三千謹撰

同 赤尾朔二郎書